【小説部門・大谷文芸賞】

十八歳駅

サレジアン国際学園世田谷中学高等学校　中学３年　白永穂美

待ち続けて、待ち続けて、もうどれくらい経っただろう。少女はずっと、この名前も知らないちいさな駅で、電車が来るのを待っている。何色の、どんな電車だろう、どんな駅を通るんだろう。どんな人が乗ってくるんだろう。想像して、想像して。こんなに待ちわびているのに、電車は一向にやってこない。一緒に待っていたともだちは、「先にいくね」と言って、少女が乗ることのできない電車に乗って行ってしまった。おんなじ電車に乗ろうって約束したのに、とびきり早い特急電車に乗って、今頃はもう、少女のことなど忘れてしまっているのだろう。少女は悲しくないふりをして、ホームに並んだ椅子を全部使ってねっころがった。こんなことをしても、叱る人は誰もいない。この駅にいるのは、少女一人だからだ。

待ち続けて、待ち続けて、ついにひとりぼっちになっても、電車はまだ来ない、まだ来ない。線路を客席にして、ホームを舞台にしておとぎ話のお姫様になりきってみる。電車が感動して、止まってくれるんじゃないか、ってちょっと期待する。線路と線路の下敷きになった道路が、つまらなそうに見つめているだけだってことをわかっていながら。なぜ電車は来ないのだろう。どこかで大雨が降ったせいで、長い間遅延しているのか、それとも車庫を発車すらしていないのか。理由を考えてみるけど、答えを教えてくれる人は誰もいない。

少女の駅に、特急電車は止まらない。よくあるデザインの電車が、ときおり、簡素な駅とたたずむ少女を馬鹿にしたように通過していくだけだ。中の乗客は、少女に見向きもしない。あんな電車、たとえ止まったとしても乗ってやるものか、と強がる。それでもやっぱり、あんなに速い電車に乗れる人たちがうらやましくなった。どんなに遅い鈍行でもいいから、はやくわたしの前に止まってよ。少女は泣きたくなるのをこらえてなにもない空間を見つめる。まだ来ない、まだ来ない。実はもう、電車はとっくの昔に通り過ぎていて、自分が見逃してしまっていただけだったらどうしよう。夜中、そんなことを考えて不安になる。そんなはずない、と頭ではわかっていながら。そんな日々に嫌気がさしても、待ち続けるしかない。昨日も今日も、一昨日も、電車は来なかった。でも、もしかしたら明日来るかもしれない。明日だめでも明後日は来るかもしれない。明後日がだめならその次の日。そう思うしかない。そうして電車が来たことは一度もないけど。

また、いつものとおり特急電車が、少女を嘲笑うように大きな音を立てて彼女の前を通過した。中には、親子が乗っていた。優しそうな父と母、小さな男の子と女の子。周りには、沢山の人がいる。でも、ちっとも窮屈そうじゃなくて、どの人も、温かい笑みを浮かべていた。特急電車に乗れるということは、とても恵まれた家族なのだろう。だが、少女は知っていた。あの電車に乗っていた子どもたちが、いつまでもああして、両親と同じ電車に乗り続けていられるわけではないこと、彼らがいつかどこかで、別の電車に乗り換えなければなら

ない日がくることを。あの子たちが自ら望んで降りるかもしれないし、そうじゃないかもしれない。なんにせよ、家族が今通過している幸せのトンネルは、永遠には続かない。子どもたちはいつまでも子どもなわけじゃない。十数年後にはきっと、今の電車を降りて、知らない駅の知らない電車に乗っているだろう。だけど、必ずしもスムーズに別の電車に乗れるとは限らない。今、あなたたちが憐みの目を向けた、誰も降りない無人駅にたたずむ少女のように、長い間ずっと何もない駅で待ち続けなくてはいけなくなる可能性は大いにあるのだ。いきなり急行電車に乗れる可能性より、ずっと高い。

少女は考える。電車が来ないのは、自分になにか足りてないところがあるからなんじゃないか。電車に乗れるようになるには条件があって、自分がまだ、それを満たしていないからなんじゃないか。でも、そんなことを教えてくれる人は誰もいなかった。わたしの電車は、わたしのなにがお気に召さないのだろう、なにが不満なのだろう。忘れ物は何度も何度も確認した。どのカバンのどこに何が入っているかも、ちゃんと覚えている。雨が降った時の傘は、一番大きなカバンの大きなポケットにしまってある。でも、傘の出番が来る気配はない。からっからに乾いた傘が、音も立てずに泣いているのを、少女はただ、黙って見ていることしかできない。少女だって少し前までは、両親と一緒の電車の中でぬくぬくしていたのだ。決して早い電車ではなかったけれど、ゆっくりと、でも着実に前に進む、良い電車だった。いつまでもあの電車に乗っていたかった。けれど、ある日突然、自分でもわからない「なにか」を見つけ出すためにその幸せな電車を降りなければならなくなった。単純に、もう子どもではいられなくなったからかもしれない。でも、それ以上の「なにか」が自分の中にあって、そのために電車を降りたような気がしていた。降りてしまった以上、もう両親のいるあの電車に戻ることはできない。だから、自分がこんな場所にいるのには、すごい理由があるからで、その理由を思い出したとき、未来へと導いてくれる電車が現れる。そう、思うことにしていた。そうじゃなくても、そう思いたかった。

ある日、少女の駅に急行電車が止まった。よく見るデザインの電車ではなく、昔ながらの奥ゆかしさがある、美しい電車だった。胸が弾んだ。とうとう来たのだ、わたしのもとにも、わたしの為の電車が。

ドアが開き、中から誰かが降りてきた。

帽子を深くかぶっていて、顔がよく見えないけれど、女の人だということは分かった。

飾りっけのない真っ黒なロングコートは、まるで魔女のようで、目の前にすると少し怖い。

電車は、彼女を無事降ろしたことを確認すると、少女には目もくれずに、次の場所へと走り去っていった。ホームには、少女と謎の女だけが残された。

ただ、長い、長い時間が流れた。その間、少女は何も喋らなかった。それは、謎の女も同じだった。

「あの、どこから来たんですか？」

ようやく少女の方から口を開いた。

「終点よ」

謎の女はしわがれた声で言う。どうやら、年老いた人のようだ。
「終点って？」
おばあさんは、この質問には答えてくれなかった。
「あなたは、ここで何をしているの？」
今度は、老婆が彼女に問う。
「電車を待ってるんです。私の電車。でも、全然来てくれないの。」
少女は答えた。慣れていたはずのことも、口にすると苦く、寂しさと悔しさが胸の奥底から思い出したように襲ってきて、吐き捨てるように付け足した。
「わたしのこと、忘れちゃったのかな。」
「あなた、行き先は決まっているの？」
「行き先？」
少女は老婆の言葉に面食らった。行き先、なんのことだろう。
「みらい、です・・・・。」
「みらい？未来駅なんて駅はないわよ。」
老婆は笑いながら、妙に落ち着いた声で答える。
「どんな街へ行って、どんな景色を見たいか。それが重要。電車はただ黙って待っているだけの人を乗せて行ってはくれない。どんな電車に乗って、どんな駅を通り、どんな場所で降りるのかは、あなた自身が、決めることよ。」
どんな電車に乗って、どんな駅を通り、どんな場所で降りるのか。
「わたし、自身が・・・・？」
「そう。もちろん、全部がうまくいくことなんてない。時には、間違った方角に行ってしまったり、いばらの道を進んだり、別の電車に乗り換えたりして、目的地まで自力で行くの。でも、まずはその目的地を決めなければいけない。目的地が決まっていなければ、いつまでたっても電車には乗れない。あなたの目的地はどこ？」
「わたしの、目的地・・・・」
考えたこともなかった。ただ座って待っているだけじゃ、何も始まらない。
「ゆっくりでいいのよ、あなたは今どこにいて、これから何をしたいのか。あなたの好きなこと、やっていて楽しいことは何？」
少女は思い返してみた。幼い頃、まだ、父と母のいる電車に乗っていた頃、わたしはなにが好きだっただろうか、なにが得意だっただろうか。なにに、なりたかっただろうか。
　少女は考え続けた。何日も何日も考え続けた。その間もずっと、少女の前を電車が通り過ぎて行った。あの電車に乗っている人たちはみんな、自分のように悩み、考えて、自分なりの目的地を決めたのだろうか。そして今も、目的地への旅は続いているのだろうか。
「おばあさん、目的地にたどり着いたら、どうするの？」
少女は老婆に聞いた。少女が考えている間、彼女はずっとこの駅にいて、時折懐かしそうにあたりを見渡していた。

「また新しい目的地を決めるの。」
「え？また？」
「そうよ。あなたが考えているほど、怖いものじゃないのよ、目的に向かって進むのって。人によるけれど、あなたが本当に行きたい場所なら、多少辛くても、きっと大変なのも楽しいと思えるわよ。」
「そうなんだ・・・。」
大変だけど、楽しい。そんなことを思える場所が、本当にあるのだろうか。
「おばあさん、いつまでこの駅にいるつもり？おばあさんも、おばあさんの目的地に行かなきゃいけないんじゃないの？」
「あら、優しい子ね、わたしはもういいのよ。わたしはもう、長い長い旅を終えたの。」
「終わることもあるの？」
「ええ。でも、それは、あなたには、もっとずっと先の話。」
「終点」老婆がこの駅に来た時、初めにそう言ったのを思い出した。
最後に少女は、もう一つだけ質問した。
「ここの駅のこと、知ってたんですか？最初から。」
「ええ、そりゃもちろん。この駅のことはよく知ってるわよ。」
やっぱり・・・。
このおばあさんは一体何者なんだろう。
そう思う少女の気持ちに気付いたのか、老婆はぐらかすように言った。
「誰しも、遅かれ早かれ一度はこういう場所に来るものよ。たまには、こういう駅でじっくり考えることも重要なの。あなたがこの駅で過ごした時間も、決して無駄じゃないことを覚えておいてね。」
「おばあさん、わたし、目的地が決まった。わたし、いつかおばあさんみたいになれるように頑張る。わたしは-----に行く。」
「そう。それなら、この駅にそこに行ける電車は止まらないわよ。」
「うん。だから、自分でその電車が止まる駅を探しに行く。さよなら、おばあさん。わたし、おばあさんのこと忘れない。本当にありがとう。」
少女は老婆に言うと、ずっと前から、もうとっくに準備してあった荷物を急いで背負った。とても重い。でも、不思議と悪い心地はしなかった。
　少女は、自分がこれから、背負ったり引きずったり、捨てたり増やしたりするに荷物の重みを背に感じながら、名前も知らない駅を出た。

　十八歳駅。誰しもが通る無人駅。
人間は、誰しもが、この質素でつまらない駅で、悩み、苦しみながら、自分だけの電車を見つけだす。

外は快晴。初めてひとりで見る景色は、今までみたどんな景色よりも美しく、これから向かう先への道しるべのように、ひこうき雲が一筋伸びていた。

　十八歳駅。それは、いつか遠い記憶となり、終点につく頃に思い出す。そして、もう一度、ちいさな無人駅に足を踏み入れたくなるのだろう。

過去の自分に少しだけ、アドバイスでもしに。